

日本は変わるか。失われた 20 年が変わりつつある兆候が見え始めた。きっと変わる。

東日本大災害の直後に、JTAS のホームページの会員専用コーナーに連載している「無料情報誌 QRU (*)」で、「東日本大災害は、日本の失われた20年が変わる切っ掛けになるかもしれない」と書きました。最近、新聞記事や論説の中で、この「変革」の兆候を探しています。その兆候が見えるような気がしますので、一まず、荒削りですが以下を書いてみました。ご批判を仰ぎます。

* : QRUとは、トントーの無線通信の時代に、国際電気通信条約の付属無線通信規則で「Q 符号」として定められて、通信士間の業務上の意思疎通用に国際的に使われた略符号の一つです。「Q 符号」は 140 種ほどもあります。QRU は「こちらに貴方宛の情報がありませんか?」を意味します。因みに「QRA?」は、「貴方のお名前は何か?」です。

60 歳代の或る男と酒を飲んだ。その男が酔うほどに「今の若者は気持ちが萎縮していて駄目だ」と盛んに息巻く。反論として色々な具体例を挙げるには知識が乏しいが、そう考えるべきなのだろうか、と多少疑問に思った。

僕の歳回りの世代は、高度経済成長の最中に社会へ出て、90 年初頭のバブル崩壊まで、ずっと上を向いて、もっぱら企業社会の中を走り続けてきた。70 年代くらいまでは、好景気で輸入が増えると外貨が不足して景気が引き締められる循環経済だったが、国の経済力が強まるに従い、外貨の蓄積も増え、円の価値も上がり、生活が豊かになった。この時期に脱サラして独立自営の仕事に移った人は、大抵それなりに成功した。こんな中で、工業製品の貿易自由化を不安に思ったり、石油ショックや急激な円高に、一時的に怯えたこともあった。80 年代には「Japan as No.1」と囃し立てられ、有頂天にもなった時期もあった。挙句の果ては 85 年のプラザ合意で円高を強要され、それが 80 年代末のバブル経済に繋がった。概して、色々な社会事象を、難無く乗り切ってきたと感じる。いまから考えると、概ね自信を持っていて、心はそれなりに裕福で、合わせな世代だと言える。

いまの若者達はどうかだろうか。バブル経済が弾けてから、かれこれ 20 年を超した。

いまの 40 歳直前の働き盛りの若者(中年?)は、90 年初頭のバブル経済崩壊の経済環境下に社会に出てきた。社会人として一人前になるべき90年代後半は、金融不安が経済を煽り、気持ちが揺れる不安定な時期が続いた。その後、2000 年頃から企業業績は、10 年近くも良い時期があり、神武景気以来の最長記録を達成したとも言われたが、余り好景気との実感はなかった。これは輸出企業の猛烈なコストダウンや人件費削減により果したものだ。企業のコストダウンは、いま年間額で 60 兆円とも言われている。これによる逼塞した労働環境が、彼ら若者の心に与える影響は軽くない。同じ職場仲間の中で、正社員と派遣社員との間の労働条件がまるで違うということは、夫々の心に隙間ができて当然だ。こうしたコストダウン努力が、その後長く続いてきた日本のデフレ経済を生んだのだ。グローバルな競争市場経済の下で、それは避けようがなかったともいえるのだが、人々の、特に職場での意識はだんだん萎えていき、「マイナスの活力」の社会環境が続いて来たのだ。「今の若者たちは、気持ちが萎縮している」と言うが、このような環境の中で、そのような若者がいても当たり前なことと見るのは間違いだろうか。若者でなくても、我々でも、置かれた社会環境の中に身を処す方法を探るはずだ。だとしたら、どうしたらここから抜け出せるかの「芽」を探すことを、年寄が真剣に考えなくてはならないのだろう、と思う。

そのためには、実は、我々年寄りの気持ちが「マトモ」なのかを振返るのも欠かせない。

我々の世代は、「秩序」について、かなり高い意識を持っている。なぜなら、我々は安定した気持ちが持てる良き時代を生きてきたからだ。

「失われた 10 年」と言われていた時分に、盛んに技術や経済、社会のイノベーションが叫ばれた。イノベーションが必要なのか否かは、夫々の価値観によるのだから、ここでは触れない。しかし、何も変えることなく「失われた 20 年」が過ぎてしまったことについては、我々世代に責任がある。我々世代が持つ高い秩序感を変革を妨げてきたのではないだろうか。マスコミによると菅首相の思いつき発言が、野党ならず与党からもヒンシュクをかっていようだが、高い秩序感の下では、そのようにしか見えないのかもしれない。「反・脱原発」意識も、秩序感のなせる業だとの見方もできる。技術屋の端くれとして一こと言わせて貰うと、原子力発電は、既に完成された技術で、技術立国日本としては、もっと新しい、別の技術を追求すべき時に来ているのではないだろうか、と言いたい。否々、より安全性を高める技術が求められている、と反論を受けるかもしれな

いが、そんな技術は既に全て確立済みなのだ。問題は「やらなかった」ことにあるだけなのだ。「廃炉技術」が未確立と言いたいのだろうが、そんなものは「ひかれ者の小唄」に等しい。高速増殖炉の開発がテーマとして残されている、との主張もあるが、朝日新聞のアンケート調査では75%の人々が原発に否定的意見を持つと伝える。国民の合意から遠く、社会が受け入れにくい技術は挑戦すべき対象にはならないだろう。それを主張するのは技術者のエゴと見られよう。新たな技術の開発が、新たな需要を掘り起こし、新たな社会を作っていくのだ、と考えるべきなのだ。目の前の事象を真正面からしか見られない。後ろに廻ってみて見ようとする「へそ曲がり」は我々の世代には少なく、その希少な人達は傍に追いやられていた。そうした真四角な秩序正しい社会性格が変革を妨げてきた原因だ、と思うのだ。

一つの提案だが、このところの大イベント、即ち、東日本大震災での人々の悲しみや忍耐、思い遣り、原発事故での作業員の隠された奮闘などに、この失われた20年を変える兆候があると見るべきだ、と思うのだ。かつて無料情報誌QRUで米ハーバード大のサンデル・マイケル教授の白熱教室を紹介した。1回目の主題は「正義とは何か」で、3月末の2回目は「東日本大災害に何を学ぶか」であった。2回目の教室で一致した意見は「日本人の絆(きずな)」だった。

それから4ヶ月経ち、原発事故対策の一段目にやっと足が届いたいま、なでしこジャパンが世界一になった。彼女達が口々にした勝因は、「思い遣りが絆を作った」だった。絆とは離れ難い心の結びつきを言う。ここに、今の若者達の持つ力と意欲を感じ、失われた20年の時代の転換の切っ掛けが見えてくる、と思うのだ。

私の娘には4歳半になる男の双子がいる。重い障害を持ち、人工呼吸器で生きている。遺伝性進行性脊髄性筋萎縮症(AMS)と言う稀な障害だ。生まれたときは普通の児と変わりがなかったが、今では、笑い顔もできず、目玉しか動かせない。それでも脳に障害がないので、なおさら哀れだ。自宅とショートステイの療養施設と、病院の間を月に一回りする。移動の時はバギーに携帯用人工呼吸器やモニター、吸引器、電源、その他色々積み込み、それを更に自動車に押し込む。1人が運転し、別の1人が彼らを看ている。重症障害者の介護は1人でも大変なのに、2人だと、もっと大変。娘が頼れるのは僕だけなので、月に1、2回は、特に移動の時に応援に駆け付ける。

生残率が5%と言われている1歳半を過ぎたあるとき、娘が言った。「お父さん、私、この児達と一緒に生きていく決心ができたよ」

僕も娘に返した。「俺もこの歳になって、何か大切なものを持てた気がする」、と。

実は、この文章を書くまで「大切なもの」が何か、良く分かっていなかった。

やっと気付いた。「きずな」だったのだと。

